

静岡

書店のない長泉町 「本を起点としたまちづくり」の取り組み

静岡県長泉町は積極的な子育て支援策で知られ、静岡県において最も人口増加率が高く、地方創生のモデルとして注目されている自治体です。一方で、そのような長泉町において、2023年8月に唯一の書店が閉店し、現在町内に書店は一軒も営業していません。

出版文化産業振興財団(JPIC)の調査によると、デジタルサービスの拡大や書店離れを背景に、このような書店がない自治体は全国で約26%にのぼると言われており、地域社会における文化接点が失われています。

そのような中で、長泉町は2023年9月に出版取次大手の日本出版販売株式会社(日販)の子会社で、都内や福岡などで有料制の書店「文喫^{ぶんきつ}」を展開する株式会社ひらくと、町内のJR御殿場線下土狩駅前^{ひらく}で食や芸術など14のテーマで選んだ本を並べるなど、本を柱に賑わいを創出する社会実験「駅前リビング」を実施しました。この

イベントは、10日間にわたり本から広がる「学び」「芸術」「食」など文化的アクティビティの溢れる交流拠点を設け、本の魅力発信と人が集う場を仕掛けたことで、読書やイベントを楽しむ子育て世代の30~40歳代を中心に幅広い年齢層約1,300人が来場し、イベント前の10倍近い人が訪れました。

その後、長泉町は本を活用したまちづくりの可能性を広げる為、2024年2月に日販と包括連携協定を締結しました。日販が自治体と包括連携協定を結ぶのは全国初で、2024年度末に完成予定の「鮎壺公園」の交流施設の空間づくりでの連携や、公共施設等における本を起点としたコミュニティの創造など、豊かなまちづくりに連携して取り組んでいく予定です。この秋には、静岡県が譲渡を受けた長泉町内の「旧ヴァンジ彫刻庭園美術館(閉館)」を活用した町主催のイベントにおいてブックフェスを開催しました。本を起点とした賑わいの場の創出、手軽に本に目を向けることができる環境を提供することで、今後も日販と連携して取り組む、本を活用したまちづくりとの相乗効果を狙っています。

書店がない地域で本を楽しむコミュニティを育む長泉町の取り組みは、本を起点とした空間が新たな賑わいを生む交流拠点となる可能性を秘めており、少子化と書店ゼロが重なる地域の活性化のヒントになりそうです。



鮎壺公園全体展望(完成イメージ)



鮎壺公園交流施設(完成イメージ)